3　H児の姿を通して（４歳児）

徳田　いずみ

２年保育のH児は、４月当初、新しい環境に慣れないせいかよく教師に話しかけてきていた。教師も２年保育児ということを考えて、H児が園の生活、雰囲気に馴染めるように努めて話を聞いたり、遊びの時に声をかけたりなど、気にかけていた。そのような中「私、字が書けるよ」「私、知ってる」というようなどちらかと言えば、知識先行型かなと思えるような言動をよく耳にした。

事例１「漢字、書けるよ」　　４月１９日（火）４歳さくら組

遊びの時間、保育室でH児が教師に漢字のことを話しかけてきた。

H児　「先生、私、漢字書けるよ」
教師　「あら。そうなの。どんな漢字？」
H児　「大きいっていう字。こうしてこうしてこんなのにかくの」
教師　「へぇ～、すごいね」
H児　「まだ、木も書けるよ」
教師　「ふうん。H児ちゃんの名前にある漢字かな」
H児　「うん。そうだよ」
教師　「H児ちゃん、もう書けるんだ」

教師は、H児が漢字に興味をもっていることを認めながら、H児がどんな遊びが好きなのか気になっていた。

○H児の学び

・先生は自分の漢字を知っていることを認めてくれるんだ。
・先生に話しかける話題は漢字のことでもいい。

○教師の学び

・H児は漢字に興味があるようだ。
・もっと体をつかった遊びにも興味をもたせる必要がある。

○今後に向けて

漢字などに興味をもつH児の知的好奇心を認めながらも、他にH児が興味のあるものは何か探っていく。そして、からだでの直接体験の幅が広がるように、場を設定したり、H児に声かけをしたりしたい。

事例２「わたしは、いい」　　４月２６日（火）

年長組のｃ児がレストランやさんをやっていると、宣伝しにきたので、教師はH児と一緒にほし組へ行ってみた。ほし組のａ児やｂ児が食器を持ってきた。

ａ児　「はい。これ、どうぞ。」
教師　「どうも、ありがとう。あ、おにぎりも入ってる。」

教師は、H児におにぎりを一口分けてあげようと、口の側まで持っていった。

教師　「ほら、H児ちゃんも一口、どうぞ」
H児　「いい～。わたしはいい」

H児は顔をよけて、あとずさりした。

教師　「紅茶はありませんか？」
ｂ児　「はい、どうぞ。これは、番茶です」

ｂ児がポットをもって湯飲みに注いでくれた。ａ児が沢山の湯飲みをもってきたので、H児にも選ばせようとすすめた。

教師　「H児ちゃん、どれにする？」

自分では選ぼうとしなかったので、教師がピンク色のものを手渡した。

教師　「ああ、おいしい。H児ちゃんも飲んでみたら？」
H児　「いいの。わたしはいいの」

教師は飲む真似をしながら、H児にもすすめたが、H児は、苦笑いしながら、飲もうとはしなかった。

○H児の学び

・先生は、本物じゃないお茶でも飲む真似をしている。
・自分は照れくさくてできないなぁ。
・お兄ちゃん、お姉ちゃん達や先生は、こんな風に見立てて遊んでいるんだ。

○教師の学び

・H児は自分からはなりきって遊ぶ経験はあまりないのかもしれない。もっと自分を解放して何かになりきって楽しんだり、見立てて遊んだりする経験が必要なのではないか。

○今後に向けて

H児はまだ慣れていないので、このようなリアクションをとったようだが、年長組の部屋でまだ関係性のない年長児の中で自分を出せないのは無理からぬことかもしれない。そこで、時間をかけて先ずは教師やクラスの友達との関係をつむいでいけるよう援助する。クラス活動やしたい遊びの時間にH児が興味をもった場に入ってかかわっていけるように教師もフォローしていく。また、もっとイメージをもって遊んだり、恥ずかしがらないで遊んだりできるように、教師がモデルとなったり、雰囲気づくりをしたりして援助したい。

事例３「ねぇ、前はここ三角だったよ」　　５月１３日（金）

したい遊びの時間、保育室内でA児が言い出して、昨日もつくった迷路をつくることになった。そして、幼児らがジュニアブロックを運び始めた。

A児　「めいろ、つくろう。」
H児　「ねぇ、前はここ、三角だったよ。」
A児　「今日は、違うねん」
B児　「昨日のやろうっと」
C児　「昨日の！」

A児とD児が、運ぶブロックの取り合いをしている。それを見てC児が「二人でやったら？」と声をかけたが、まだ取り合っている。C児が「ねぇ、みんな１個ずつにしたら？」と更に声をかけた。C児達が出来たところまでブロックの上を歩いたところで、A児が言った。

A児　「続きやるから、まだこんといて！」
C児　「じゃ、C（自分）、がんばるわ」

C児も更にブロックを運び始めた。

A児・D児「みんな、運んで！」「なくなるまで」
C児　「ここ、くっつけて！」
B児　「C児ちゃん、ここがいい」

みんなで声をかけながら、ブロックを並べていった。H児も運んではくっつけている。

H児　「もうブロックなくなったよ。」
A児　「できた！」
H児　「ねぇねぇ、これも三角なんだけど」

A児のところへH児が三角のブロックを持っていくと、A児がそれを迷路に位置づけた。そして、みんなで言葉を交わしながら、自分たちの「迷路ごっこ」を楽しんでいた。

○H児の学び

・昨日の迷路とはまた違う迷路もつくってもいいんだ。
・声をかけながら運ぶと何だか雰囲気が盛り上がってわくわくする。
・友達と一緒に運んだり並べたりすると、たちまち迷路ができる。
・A児君は自分の運んだブロックも位置づけてくれた。うれしいな。A児君ってそういう人なんだ。

○教師の学び

・H児は友達と一緒に動ける幼児なのだ。
・H児は前日の遊びをそのまま再現しようとする真面目さがある。また既習の事柄を次にいかそうとする気持ちがある。
・一緒に動いて場をつくることでより状況を捉えていっている。
・言葉を交わしながらつくることで、相手の考えが分かる。

○今後に向けて

友達と一緒につくる楽しさを味わうこのような体験の場をもっと増やしていく。それによって、人とかかわり合う中で培われる心的成長が期待される。また、H児の既習事項をいかそうとするよさを支えていき、それをもっといかすような環境を設定していきたい。また、こだわらずに創意工夫していく周囲の友達のよさもH児が受け入れていけるように援助していきたい。

事例４「そんなのあたりまえだよ」　５月２５日（月）

したい遊びの時間に、E児が透明のプリンカップの底にピンク色のマジックをつけていた。そこへ水を入れ、光に透かしてその影が地面に映るのを眺めていた。

W教師　「お水入れたの？」
E児　「地面もきれいやよ」

W教師　「あら、ほんとだ。地面きれいやね」

地面にピンク色の影が揺れている。そこへH児がやってきて言った。

H児　「そんなのあたりまえだよ。ピンク色のマジック、塗ったからだよ」
W教師　「そっかぁ」

その後、H児は自分でプリンカップをとって、E児のものと同じように底にピンク色を塗り始めた。そして、プリンカップの影を地面に映して見ていた。

H児　「あれ？」

影が揺れないので、今度は水を入れてきてまた確かめている。W教師がそれを見て声をかけた。

W教師　「水を入れたら、ゆれてるね」
H児　「水を入れたら、ゆれたね」

そして、降園時刻になった。

H児　「先生、私のカップ知らない？」
T教師　「あぁ、あのピンク色がついたカップ？それなら、鏡の前にあったよ」

と鏡の前を指さした。

H児「あった！」

その日、H児はそのプリンカップを大事そうに持って帰った。

○H児の学び

・水を入れると影がゆれる（水を入れなかったら、影がゆれない）。
・友達の真似をしてみたら、面白かった。
・地面の影が揺れていたのは、ピンクのマジックのせいかと思ったら、どうやら水のせいだったみたいだ。
・自分で実際にやってみたら、不思議なことの理由が分かる。

・不思議なことってあるもんだ。

○教師の学び

・先入観の入った言葉を言ったH児だが、自分でも真似してみようという意欲がある。

・実際にやってみることで、自然の原理を目の当たりにすることができる。

・幼児は、思い入れのあるものは探してでも持って帰ろうとする。

○今後に向けて

「とてもすてきだ」と感じた友達の遊びをモデルとしながら、実際に自分でも一つずつ全部やってみようとするH児のよさやその感性を認めていく。そして、からだで感じているこのような体験の幅を広げると共に、友達のしている遊びや友達との遊びの中に面白いことがあることを感じ取らせていく。

事例５－①「先生とって」　　５月２４日（火）

園庭で教師が、男児らと共にダンゴムシを探していると、そこへH児がやってきた。

H児　「ねぇ、虫、どこにいるの？」
教師　「えっとね、枯れ葉の下にいると思うんだけど」
H児　「先生、一緒にさがそう」
教師　「うん。さがそうね。H児ちゃん、葉っぱの下、さがしてごらん」

H児は、おそるおそるそっと葉をめくりながら、さがしている。教師はＦ児やＧ児らと一緒に枯れ葉の下や、杭の下、植木鉢の下などをめくってさがしていた。

教師　「あ！ダンゴムシさん、いた！」
H児　「先生、とって、とって」
教師　「H児ちゃん、つかまえてごらん」
H児　「え～～」

H児が尻込みしたので、教師がダンゴムシをつかまえて、H児の手に乗せようとした。H児はこわごわ手を広げた。

H児　「わぁ～、くすぐったい」

教師　　「ほら、かわいいでしょ」

教師はそう言いながら、手の上のダンゴムシをちょんと触ると、ダンゴムシがころんと丸くなった。H児は不思議そうな表情で見つめていた。

この日以来、Ｉ児らと共に虫探しをしているH児の姿を園庭でたびたび見かけた。虫かごの中をのぞくと１０匹くらいのダンゴムシがいることもあった。また、５／３１から年長児年中児全員が園庭で遊ぶという場所を限定した遊びの時間にしてから、H児は否応なしに外での刺激を受けざるを得なかった。そして、ダンゴムシの探し方や捕まえ方を習得していったようだった。

事例５－②「どっちの手にいると思う？」　　６月１４日（火）

園庭でH児が教師に何やら見せにきた。

H児　　「先生、ほら。ダンゴムシつかまえたよ」

H児は右手と左手にそれぞれ小さいダンゴムシとそれよりさらに小さいダンゴムシとを持っていた。

教師　　「あら、かわいいダンゴムシさんだね。」
H児　　「うん。小さいよ」

H児は今度はダンゴムシの入った手を握り、教師の前に差し出した。

H児　　「小さいダンゴムシ、どっちの手にいると思う？」
教師　　「う～ん、どっちかなぁ。じゃ、こっち！」

教師が片方の手を指すと、H児はその手を開いた。小さい方のダンゴムシがその中にいた。

教師　　「やった！」
H児　　「あたり～」

H児は、うふふと笑って、ダンゴムシのいる手をそっと握った。

＜5－①では＞

○H児の学び

・ダンゴムシは枯れ葉などの下にいる。

・先生と一緒なら捜せる。

・ダンゴムシを手に乗せてみたら、くすぐったい気がした。

・ダンゴムシはころんと丸くなる。不思議だなぁ。

○教師の学び

・ダンゴムシを捜したり触ったりしたことのないH児には、多少こちらが援助してやってもよい。

・教師の動向をよく見ているH児に、虫とりをする姿を見せることで、外への興味をもたせることができる。

○今後に向けて

虫に興味はあるものの、まだ探したり触ったりといった経験のほとんどないH児に対しては、一緒に虫探しをしたり、教師が触って見せたりしながら、虫に対する抵抗感を少なくしていく。

＜5－②では＞

○H児の学び

・ダンゴムシには小さいのもいる。

・ダンゴムシで先生にクイズを出すことができる。

・ダンゴムシは、逃げない＆潰れない力で握るといい。

・ダンゴムシを触ってももう全く大丈夫だ。

○教師の学び

・H児ははじめダンゴムシをこわがっていた様子だったが、ずいぶん慣れてきたようだ。

・園庭で限定して遊ぶことで、頭でっかちのようだったH児が自然のものに目が向いてきた。

○今後に向けて

ダンゴムシなどの虫に対して、触れ親しめるようになってきたH児である。今後は、ダンゴムシに関する一連の経験を他の分野でもいかせるように援助したい。そして、何でも挑戦してやってみればできるといった自信を高めていきたい。

事例６「こわいの」　　６月１６日（木）

園庭で遊んでいる時のことである。

H児　「先生、見てー！」

ユニオンサークルの雲梯の所でH児がぶら下がることに挑戦している。教師は側に寄って、H児の動きを見てみることにした。H児は２番目の棒のところにぶら下がっている。

H児　「ほら、ぶら下がれるよ」
教師　「うん。すごいね」

今度はＬ児が雲梯にぶら下がって、手を前に伸ばし、一本一本進んでいる。６つ目の所まできた。

教師　「わぁ、Ｌ児ちゃん、こんなところまで来られたね」

すると、H児が「今度は私がする」と言って、ぶら下がり始めた。一本目、２本目、３本目・・・

教師　「わぁ、H児ちゃん、さっきよりたくさん進んでる！」
H児　「こわい～」
教師　「がんばれ。あともう一つ。ほら片手伸ばして」

H児は懸命に手を伸ばした。４本目に右手がかかった。

教師　「よし！こっちの手も！」

何とか左手も４本目に届いた。

教師　「やった！４本目までいったよ」

H児は力尽きて、ストンと着地した。

H児　「ああ～、こわかった」

怖さと嬉しさの入り交じったような表情を見せた後、今度は吊り輪に挑戦し始めた。両手で

輪を持ち、更に輪の中に足を入れ、膝をぎゅっと曲げて輪から足が抜けないようにしている。そして、こうもりのように逆さまにぶら下がり、手をひらひらさせた。その後くるりと回転して着地した。

教師　「H児ちゃん、コウモリみたいに逆さまになったね。気持ちいい？」
H児　「ううん、こわいの」

H児はそう答えながらもまた、同じように吊り輪にコウモリのようにぶら下がっていた。

○H児の学び

・自分のからだを手や腕で支えることは、とても力がいる。
・友達が6本目までいったから、自分も頑張った。
・先生が応援してくれたら、4本目までいけた。
・いつ力尽きて落ちるか分からないので、高い所にぶら下がるのは、こわい。
・逆さまにぶら下がるのもこわい。
・こわいけど、何故か何度もやってみたい。
・逆さまに足でぶら下がる時は、曲げた足の力を緩めたらだめだ。

○教師の学び

・友達が自分より遠くまでいったから、自分ももっとやりたいという意欲をもった。
・教師の励ましで力の限界に挑戦できるH児だ。
・H児は自分の力の限界を知ろうとしている→自分を知ることにつながる。
・ぶら下がることで自分の体の重さを手のひらや腕で実感できる。

○今後に向けて

H児は教師の自分への眼差しを支えに、挑戦しようとする気持ちが大いに膨らむようである。教師はH児に対して、今後も認める援助を続ける。また、友達とのかかわりの中で、H児が自分の思いを発揮し、経験を重ねていけるように場を設定するなどしていく。

事例7「先生、それ貸して」　6月22日（水）

前日から始まった水かけっこ遊びが今日も園庭で始まった。幼児らはきゃあきゃあ歓声をあげている。教師は上部を切って筒型になったペットボトルを手にして、幼児らの運動着がびっしょりになる位かけた。

教師　「それっ、行くよー！」
I児　「きゃー」

Ｉ児は面白がって水の入った容器（洗剤などの空き容器）を手に教師を追いかけてくる。今度は５歳児のｄ児やｅ児らも教師に水をかけてきた。

ｅ児　「かけてやるー」
教師　「わぁ！よぅし、お返しだ！」

幼児らは服をびしょびしょに濡らしながらも笑顔である。そんな様子を周りで見ていたＨ児も水の入った水鉄砲（洗剤などの空き容器）を手に教師に向かって水をかけてきた。教師はＨ児にも同様に水をかけた。Ｈ児は水をかけられて、少し戸惑いながらも、嬉しそうである。何度かかけ合った後、Ｈ児が、

Ｈ児　「先生、それ貸して」
教師　「あ、これ？いいよ。はい。」

と、教師が持っていたペットボトルを貸してほしいと言ったので、教師はＨ児のものと交換してやった。Ｈ児はそれを使って、教師やＩ児らに水をかけて楽しんでいる。

Ｈ児　「えーい！」
教師　「あ、やられた！」
Ｉ児　「わぁ」

その後、教師もＨ児も他の幼児らと水かけっこを楽しんだ。しばらくしてＨ児の「やめて。やめて」という声がした。Ｉ児がＨ児の顔をめがけて、何度も水をかけているところだった。Ｈ児は、少し不機嫌な表情を見せたが、Ｉ児がやめると、また水かけっこを続けた。

○Ｈ児の学び

・水かけっこは楽しそうだなぁ。
・顔に何度もかけられるのは嫌だ。
・先生の持っているペットボトルだと、一度に沢山かけられるようだ。
・濡れても水遊びは楽しい。でも顔にかかるのは少し苦手だ。
・筒型ペットボトルの方が沢山水をかけることができて、友達が喜んでいる。面白そうだ。

○教師の学び

・H児は体に水をかけられるのは平気だが、顔に何度もかけられるのは、不快なようだ。

・教師のもつ容器やその使い方は、幼児にとって体験の幅を広げる手だてになっている。

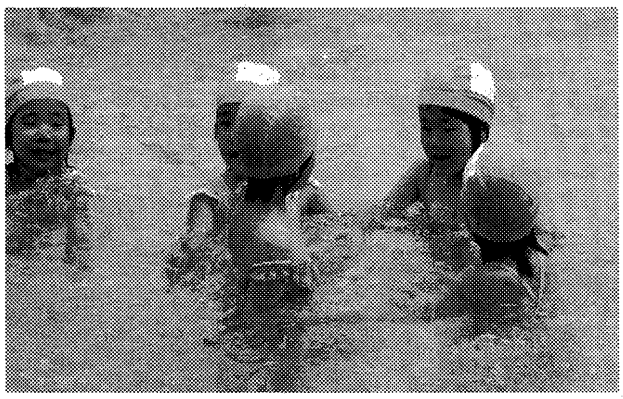
・いろいろな容器を置いておくことで、H児ら幼児たちは、容器の違いを比べることができる。

○今後に向けて

教師との関係を密にしながらも、友達とみんなでつながって遊べるように意識してかかわっていく。

事例８「先生、手、放して」　　７月１１日（月）

年中組のみんなで、プール遊びをした。天気も良く、どの幼児も水の感触が気持ちよさそうだ。みんな笑顔である。Ｊ児やＫ児らは歩く教師の腕につかまって、ふわふわ水の中で浮く感覚を楽しんでいる。Ｚ児やＦ児、Ｇ児らは手をつなぎ合ってもぐったり、引っ張り合ったりしながら、水しぶきの中、歓声をあげている。H児も他の幼児らと同様、プールの中に胸まで入っていた。そこへ教師がH児の横へやってきた。



H児　「先生～！」

教師　「H児ちゃん、気持ちいい？」

H児　「うん」

教師　「一緒に歩こうか」

H児の両手を持ち、教師は笑顔でH児と向き合いながら後ろ向きに歩いた。H児は引っ張られるようにして前向きに進んでいる。

教師　「ほら、足、離してごらん」

教師はもっと早く進んだ。H児は教師と両手をつないだまま、すーっと引っ張られている。

H児　「わぁ～、はやい～」

教師　「H児ちゃん、顔つけられる？」

H児　「えー」

そう言いながらも、H児は顔を水面につけた。そして、すぐに顔をあげた。目をしばしばさせながら、顔をしかめている。顔についた水を拭いたそうにしたが、教師と両手をつないでいるので、すぐには拭けない。教師もそれを分かっていながら、しばらく手をつないだままにしていた。

H児　　「先生、手、放して」

教師が手を放すと、H児はすぐに顔を手で拭った。

H児は、ほっとした表情になり、また教師と一緒に歩いた。その後は、みんなで歩き回りながら、プールを大きな洗濯機のようにしたり、音楽に合わせて踊ったりした。

後日、H児は、「私、顔つけられるよ」と教師に伝えにきた。母親の話によると、家では「お母さん、お風呂に水入れて」と頼むと、自分で何度も顔をつける練習をしていたそうである。

○H児の学び

・先生に手を持ってもらうと、はやく歩けた。
・先生に「顔つけられる？」と言われて顔をつけてみたら、つけられたけれど、顔に水がつくのは嫌だな。
・水の中で両手をもって引っ張ってもらい、足を床から離すと早く進む。

○教師の学び

・H児は、顔を水につけるのはまだ慣れていないが、前向きに取り組むことができる。
・教師も一緒になって笑顔で水に入ると、楽しい雰囲気の中、勢いでできることがある。
・教師の意図的につくった状況（幼児にとって少し困った状況）の中で、体験できたり、意欲を喚起したりすることができる。
・H児は自分の課題を自分でクリアしていく意欲をもっている。

○今後に向けて

H児は、少し苦手なことでも、できるようになりたいとチャレンジしようとする意欲をもっている。H児の感性を刺激するような環境構成や活動を今後も工夫していきたい。また、H児にとって友達に目が向いていくような援助を心掛けていきたい。そして、H児が友達との関わりの中で一つ一つ学んでいけるように場を設定するなどしていきたい。

～H児の事例を通して見えてきたこと～

H児は、入園当初事例１や２に見られるように知識先行型かのような姿を見せていたが、次第に心を解放し始め、周囲の様々な事象に素直に興味をもち、自ら取り組んでみようとする真面目な姿を見せるようになった。そして、周囲の環境を取り込むかのようにいろいろな体験を重ねていっている。それらの体験は、「からだ」で感じる一実感していることであり、知らず知らずのうちにH児のからだの中に積み重なっていっていると思われる。生活の多様な場面で多くのことを実感していると思われるが、ここでは事例から見えてくることをキーワードにして考察してみる。

H児がH児を取り巻く環境の中で“実感”していると思われること

＜自然を通して＞

水を入れると影も揺れるのは不思議である（事例４）
ダンゴムシなどの虫を触るとくすぐったいといった感触（ここちよさ）がある（事例５）
虫は不思議な動きをする（事例５）
ダンゴムシを触る時の力加減（事例５）
顔に水をかけられることの不快感（事例７）

＜人とのかかわりや場の雰囲気を通して＞

友達と一緒につくるのは、楽しい（事例３）
自分とは違う考えの友達もいる（違う価値観との出会い）（事例３）
沢山水をかけると友達が喜びそうだ（友達とのかかわり）（事例７）
友達が頑張るから、自分もやりたい（意欲・挑戦）（事例６）
先生がはげましてくれるから、もっと頑張ろう（信頼感・意欲）（事例６）
友達が楽しそうにはしゃいでいる中だと勢いでできる（意欲・挑戦）（事例８）
顔に何度もかけられるのは嫌だ（友達とのかかわり）（事例７）

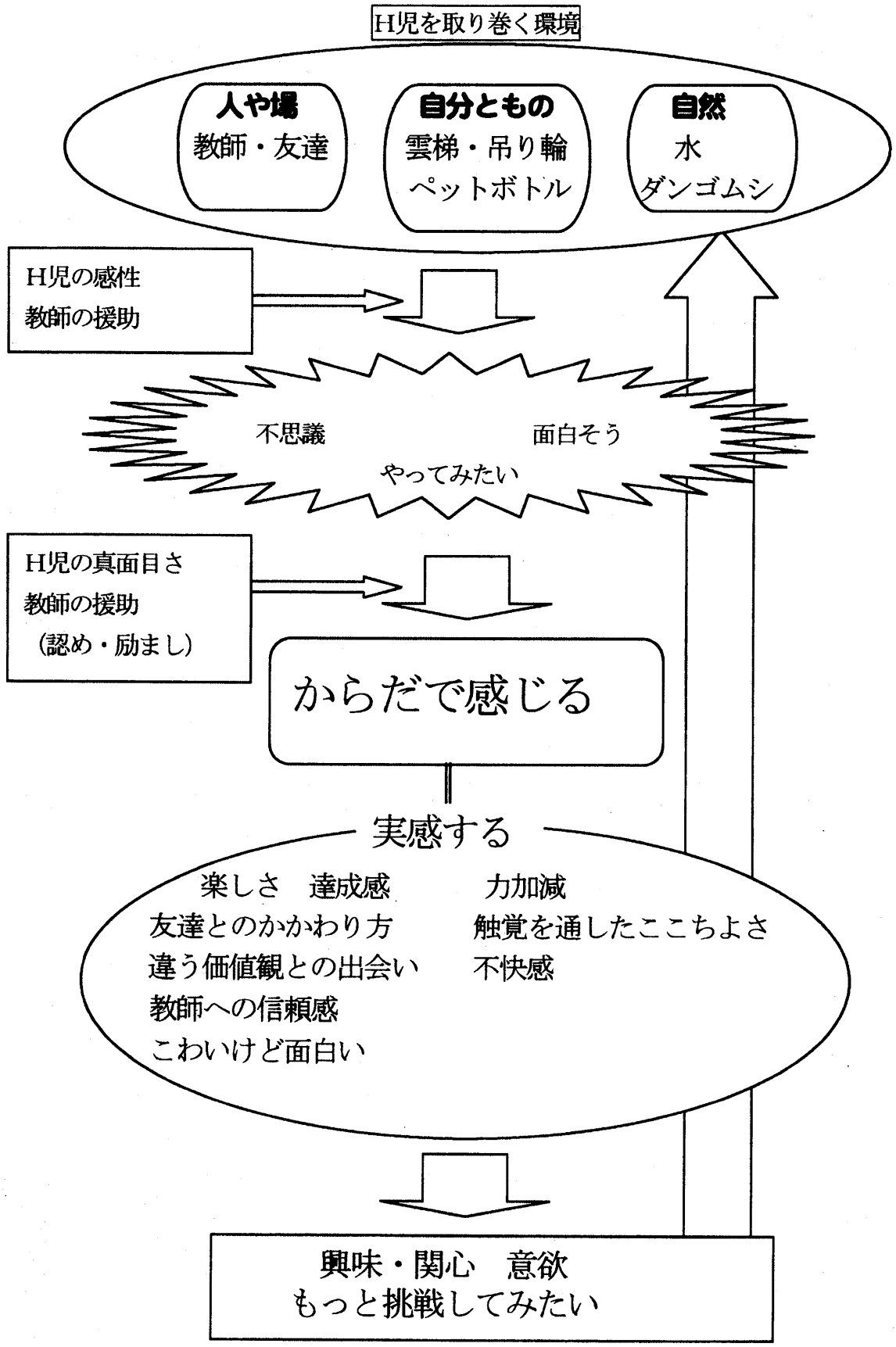
＜自分と「もの」を通して＞

自分のからだを支えるには力がいる（力加減）（事例６）
たくさんぶら下がって進めた（達成感）（事例６）
逆さまにぶら下がるのは、こわいけど面白い（逆さ感覚）（事例６）
教師のペットボトルだと沢山水をかけられそうだと推測する（事例７）

これらのキーワードで表されることがらを下図の中に位置づけてみる。様々な環境の中から自ら課題を見つけ、取り組み、また課題を見つけていくプロセスにおいて、「からだ」で感じていく（実感する）様々なことがらがH児の学びになっていると思われる。更に言えば、そのプロセスの繰り返しがH児の自分づくり（主体の形成）を支えていると考える。

今後の課題として、H児の場合は友達とのかかわりという点で自分なりに思いを主張しながら、心とからだを通していろいろ実感してほしいと願っている。そのため、教師は意識的にかかわりの場を仕組み、H児と周囲の友達とのトラブルやそれによってH児自身が心の中で葛藤する姿を見守ったり、支えたり、励ましたりしていきたい。

＜H児の学びのプロセス＞


H児を取り巻く環境
人や場
教師・友達
自分ともの
雲梯・吊り輪
ペットボトル
自然
水
ダンゴムシ
H児の感性
教師の援助
不思議
面白そう
やってみたい
H児の真面目さ
教師の援助
（認め・励まし）
からだで感じる
実感する
楽しさ　達成感
友達とのかかわり方
違う価値観との出会い
教師への信頼感
こわいけど面白い
力加減
触覚を通したここちよさ
不快感
興味・関心　意欲
もっと挑戦してみたい